

小 学 校

平 成 7 年 度

教育研究員研究報告書

生 活

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員（生活）名簿

氏 名	地 区 名	学 校 名
畠 山 桐 子	千 代 田	お 茶 の 水 小 学 校
◎濱 田 裕 子	港	弁 小 学 校
○嶋 崎 妙 子	文 京	小 日 向 台 町 小 学 校
水 谷 光 一	台 東	台 東 小 学 校
中 村 敬 子	目 黒	向 原 小 学 校
水 品 桂 子	渋 谷	中 幡 小 学 校
影 山 与 賜 也	葛 飾	葛 飾 小 学 校
宮 崎 倉 太 郎	府 中	四 谷 小 学 校
森 田 直 子	町 田	南 第 一 小 学 校
谷 合 ま ち 子	国 立	国 立 第 一 小 学 校
東 出 江 里 子	あ き る 野	多 西 小 学 校

◎ 世話人

○ 副世話人

担当 教育庁指導部初等教育指導課 指導主事 矢 崎 良 明

目 次

I 研究主題	2
「児童一人一人の気付きを大切にし、深める支援の工夫」	
研究主題設定の理由	2
II 研究主題についての基本的な考え方	4
III 研究の全体構想	5
IV 研究の内容と方法	6
1. 気付きの見取り方の工夫について	7
2. 気付きの深まりに応じた支援表について	8
V 実践事例	
1. 自然の中での遊びを通して気付きを深めた支援の工夫例	9
第1学年「城山に遊びにいこう」	
2. 家族とのかかわりを通して気付きを深めた支援の工夫例	11
第1学年「やってみたいな」	
3. 飼育活動を通して気付きを深めた支援の工夫例	14
第1学年「生き物となかよしになろう」	
4. 栽培活動を通して気付きを深めた支援の工夫例	20
第2学年「野菜を育てよう」	
VI 研究の成果と今後の課題	24

＜要 約＞ 小学校教育研究員（生活）

本部会では、「児童一人一人の気付きを大切にし、深める支援の工夫」を研究主題にかかげ、授業研究を中心にして研究を進めてきた。研究を進めるに当たっては、気付きの段階を設定し、その段階に基づいた活動計画や気付きの段階に応じた支援表を作成するとともに、その有効性について検討した。

I 研究主題

児童一人一人の気付きを大切にし、
深める支援の工夫

1. 研究主題設定の理由

生活科の「公園に遊びに行こう」の単元での1コマである。子供たちが小高い崖になっている所から、ダンボールで滑り降りる遊びに夢中になっている。A児は、この日のために祖父に作ってもらったロープ付き箱型ダンボールぞりをもって意気揚々と遊び始めた。しかし、このぞりが思うように操縦できず、すぐ前につんのめって転んでしまう。次第に苛立ち、今一つ遊びに夢中になり切れないA児は、「みんなのようにうまく滑らないのはどうしてだろう」「平らじゃないから、うまく滑らないのかな」「でも、おじいちゃんがせっかく作ってくれたぞりだし……」「でも思い切ってこわして平らにしてみようかな」と葛藤を繰り返し、ダンボールぞりを何とかしようと四苦八苦していた。

そこで教師が、「どうしたいの？」と声をかける。A児は思い切ったように「こわす」と答える。「せっかくおじいちゃんが立派に作ってくれたのに……。でも平らにしたいのね」と言う教師に、「真っすぐにすれば、みんなみたいに滑るから」とA児は言い、その後、納得したように黙々と解体作業をはじめた。

この時、教師はA児の試行錯誤の様子から、心の内面に潜む疑問や気付きを見取り、「どうしたいの？」という言葉掛けにより、A児から「真っすぐ（平ら）にすれば、みんなみたいに滑るから」という言葉を引き出している。A児も教師の「平らにしたいのね」という言葉から、ダンボールを平らにすることを認めてくれたという安心感で、次の活動へと自信をもって進めていったのである。この後、A児の活動は解体した部品を使って新しい遊び（スキー遊び）を工夫するというふうに、新たな活動へと興味・関心を高め、さらに豊かに発展していったのである。

教師の言葉掛けが、児童の気付きを認め、引き出し、さらに広げる適切な支援となった一例である。



生活科では、活動や体験を通して学習することを重視している。活動や体験は、児童にとって、生きることと学ぶことを連結する働きをする。低学年の児童の特徴として、自分の身体と諸感覚を働かせることによって、遊びや生活の中から学んでいくのである。つまり子供たちが身近な環境に対して、自分自身の身体と諸感覚を働かせてかかわり、そこから返ってくるものを頭の中で活発に考えたり、気付いたりし、さらにまたそれに働きかけ、応答するという、身近な環境への働きかけに支えられた知的な活動の展開である。

このように生活科では、自ら体験的に身近な環境とかかわり、その中で気付き、分かることを大切にしているのである。この実感的・主体的な分かり方こそが気付きであり、この気付きを大切にしていって積み重ねていくことが、社会認識や自然認識、そして自己認識の芽を育てることにつながっていく。さらにこのように、児童が体験を通して自ら得た気付きは、児童の自信や意欲となり、自分と身近な環境とのかかわりを広げ深める力として、これからの学習や生活に生きて働き続ける力となるのである。つまり、気付きを深めることを大切にすることは、児童のものの見方・考え方の芽を育て、自立への基礎を培うことにつながっていくのである。

しかしながら、この気付きは単に知的な認識の芽生えだけでなく、対象への興味・関心・意欲・態度といった情意的な側面をもつ意識の状態でもあり、相互に関連をもちながら、一体的に伸びていくもので、児童一人一人の気付きには、質的な相違がある。また、気付きは児童に一律に生まれるものではなく、個人差があり、その内容はきわめて個性的、多岐多様にわたるものである。そのため、生活科実施4年目の現在でも、「生活科では、子供たちは楽しそうに活動はしているが、それでどのような力がついたのか」「子供たち一人一人にどのような力を付けさせるのか」等の指摘もあり、教師が児童一人一人の気付きを見取ること、特に児童が本人も意識していない無意識の気付きを見取り、それを明確な形のものとして児童から引き出し、適切に深め、広げる支援を行い、より確かな、児童が主体的に学ぶ力の育成につながる生活科の授業を目指すことが課題となっている。

そのために、教師は一人一人の児童が、その子なりの気付きができるように、また、児童が周囲の様々なものとかかわりを通して、自分自身にも気付いていけるよう、一人一人の児童に即した適切な支援をしてやらなければならない。それには、教師は、児童がどのようなことに興味を持ち、どんな疑問を抱いているかなどを可能な限り見取っていく努力が必要である。また、児童が気付いた事柄を鋭く見届け、適切な声かけ・助言等によって明確にして引き出してやったり、ふくらませてやったり、活動や体験をより豊かに実りあるものに高めていく中で、気付きをさらに広げ、深めてやったりする支援が求められている。

そこで、教師が具体的な活動や体験を通して得た児童の気付きを見取り、さらに対象と十分にかかわらせ、気付きを深めていく支援が重要であると考え、研究主題を「児童一人一人の気付きを大切に、深める支援の工夫」と設定し、研究を進めていくことにした。

Ⅱ 研究主題についての基本的な考え方

気付き

「気付き」は、興味をもって活動していく過程の中での認識の芽生えであり、思考の基礎となるものである。生活科では具体的な活動や体験を通して学習が展開され、自ら主体的に環境とかかわる中で分かることを大切にしている。その主体的な分かり方が「気付き」である。

本部会では、児童が具体的な活動や体験をする中で、自ら心や身体を通してとらえたものすべてを「気付き」と考え、その気付きの多様性やその過程をとらえていくことにした。

児童一人一人の気付き

体験的活動は、一人一人の中に成り立つものである。同じ活動をしていても気付きは様々である。こうして得られる気付きは、児童一人一人の興味・関心、個性や能力、また、これまでの体験（経験）によって異なるということができる。

気付きを大切にする

児童の興味・関心を高め、意欲を継続させるためには、一人一人の気付きを大切にしたい学習活動が展開されなくてはならない。外に現れた行動だけでなく、つぶやき、表情、カード等に表現されたもの、児童が準備した用具等にも、一人一人の思いが伝わってくるものがある。

思いのこもった表現や夢中になって取り組んでいる活動の中で一人一人の気付きを見取り、認めることが「気付きを大切にする」ことと考えた。

気付きを深める

自然や社会、人とかかわりの中で新しい発見をしたり、自分の考えをもったり、見方が広がったり、対象へのかかわり方に工夫や変化が見られたりすることをとらえて、「気付きが深まる」と考えた。

初期の気付きは、自分で意識していないこともある。また、意識していても消えていく場合もある。情動的側面を伴いながら、自分自身が気付きを意識し、次の活動へと継続することで「気付きが深まった」ととらえる。

例・・・オタマジャクシ「かわいいな」から

「カエルになるんだね」 「飼ってみよう」
「なにを食べるんだろう」 「後ろ足が生えてきた」
「飼っていて楽しい」などへ

支援の工夫

本研究では、児童一人一人の気付きを大切にしたい見取り、児童が主体的な活動の中で、気付きを深めていくための教師の役割を「支援」とした。

支援は、活動計画を立てる段階から始まり、学習後の日常生活での活動に対しても行うようにしていきたい。そのためにはまず、一人一人の先行経験や友達関係など児童理解が大切であり、個々の児童の思いや願いを教師がよくくみ取っておくことが必要である。また、教師が一人一人の気付きをよく見取ることが大切なので、見取り方も工夫していく必要がある。

気付きを深めるための様々な方法や教師のあり方を「支援の工夫」と考えた。

Ⅲ 研究の全体構想

＜研究の背景＞

- ◆＜自立への基礎を培う＞ 子供が体験を通して自ら得た気付きは、子供の自信や意欲となり自分と身近な社会や自然とのかかわりを広げる力として、これからの学習や生活に生きて働く力となる。つまり、気付きを深めることを大切にするには、子供のものの見方・考え方を育て、自立への基礎を培うことにつながる。
- ◆＜生活科の問題点＞ 生活科実施４年目の現在でも「生活科で子供たちにどのような力をつけさせるのか」という声が聞かれ、子供が主体的に学ぶ力の育成につながる生活科の授業を目指すことが課題となっている。

＜研究主題＞

児童一人一人の気付きを大切に、深める支援の工夫

＜研究のねらい＞

- ・ 気付きの見取り方を工夫する。
- ・ 気付きを深めていく支援の在り方を追究する。

＜目指す児童像＞

- 感動をもって気付く子
- 身近な環境に進んでかかわる子
- 自分のよさや自分の成長に気付く子

＜研究仮説＞

◎体験的活動の中で生まれた気付きを見取り、引き出し、※広げる支援をすれば、児童は、身近な環境や自分についての気付きを深めるであろう。

※広げるとは、

- ①教師が全体に広げる。（友達同士でかかわらせて広げることも含む）
- ②その一人の児童の対象への見方、かかわり方をその一人の児童の中で広げる。

＜研究の内容と方法＞

- ・ 生活科に関する文献研究をする。
- ・ 気付きの見取り方の工夫について研究を深める。
- ・ 児童の気付きに応じた支援表を作成する。
- ・ 授業研究を行う。
授業記録の分析と、教師の支援の有効性の検討
- ・ 研究のまとめをする。

IV 研究の内容と方法

児童一人一人の気付きを見取り支援することによって、活動がより充実したものとなる。また、そうすることで気付きが深まり、主体的に学ぶ力の育成になると考えた。そこで、単元を通した活動の中で、どのような気付きが生まれるのかを分析し、その気付きに見合った支援を考えていくことにより、一人一人の気付きを深めていく手だてとした。

私達は、気付きを深めていく過程を大きく3つに分け、それぞれの過程において、気付きを深めるための有効な支援の在り方を探ることにした。

本表は、単元の中で児童の気付きを深めるためにどのような支援が考えられるかを気付きの過程に応じて分類しまとめたものである。

気付きの深まりに 応じた支援表		児 童 の 意 識		気付きへの教師のねがい
気 付 き が 少 な い	気付きを促す支援例 ・一人一人の興味、関心をもとにした活動ができるようにする。 ・友達とかかわるよう促す。 ・めあてをはっきり持つようにする。 ・気付きを意識できるように言葉掛けをする。 ・気付きを表出できるように促す。 ・どんな気付きも認める。 ・気付きに共感する。	⇒	自然 興味・関心 「あれ、何だろう」 「おもしろそうだな」 「やってみいたいな」	・進んで対象にかかわってほしい。 ・対象の変化や特徴に気付いてほしい。
	単元を通して行う支援 ○環境設定 ・活動場所の設定 ・関係機関との連絡、交渉 ・必要な道具の用意 ・活動時期や時間の設定 ○安全面の指導 ・危険な道具の取り扱い方の指導 ・交通安全等の指導		や 社 会 へ の 気 付 き 疑問・困難 「どうしてだろう」 「どうやったらいいのだろう」 「こまったな」 「わからない」 「〇〇さんはどうかな」 喜び・感動 「やった」 「できた、わかった」 「うれしいな」	・疑問や困難を解決する手だてを見つけてほしい。 ・失敗やうまくいかないことがあっても乗り越えてほしい。 ・他のものとの共通点や相違点に気付き、対象の特徴をつかんでほしい。 ・今までの経験や他教科の学習を思い起こしてほしい。 ・活動を通して満足間や成就感を味わってほしい。
			人 へ の 気 付 き 友だちへの気付き 「友だちのやり方を見てみよう」 「〇〇さんはすごいな」 人への気付き	・活動を通して友達のよさに気付いてほしい。 ・人とかかわりを大切にしたい。

1 気付きの見取り方の工夫について

気付きを見取る方法としては、児童のつぶやきを拾う・絵や作文など表現したものから抽出するなど、一人一人の思いを大切にすることが必要である。

そこで、日頃から児童理解に努め、児童に寄り添って共に活動することが、大切になってくる。そうすることにより、児童の性格・考え方や得意な表現方法などが分かり、その児童に合った支援をすることができるのである。

しかし、一人一人の気付きが広がり深まったかというのは、それら個々の物や1単位時間だけの記録では、わからない場合もある。

そこで、私達は、単元終了まで長期に渡り、児童の記録をとるように試みた。そうすることで、児童の気付きの深まりが分かり、的確な支援の仕方が分かると考えた。

気付きを深める支援例	
⇒	・気付きに共感する。 ・気付く観点を示す。 ・気付いたことを表現できるようにカード等を用意する。 ・気付きを友だちに知らせる場を設定する ・一緒に原因を考える。 ・自由に調べることができる資料等を用意する。 ・友達同士で情報交換する場を設定する。 ・身近な人に聞いてみるよう助言する。 ・比較の観点を示す。 ・今までの経験を思い出すように言葉掛けをする。 ・立ち止まって考えるようにする。 ・時には反論する。
	・教師も児童の感動や気付きを共有する。 ・感動したことを表現するよう促す。 ・活動や気付きを他の児童に紹介する。
	・友達の活動にも目を向けるよう促す。 ・友達同士で情報交換する場を設定する。 ・活動や気付きを他の児童に紹介する。 ・友達とのかかわりの場面を拾い上げ賞賛する。 ・家庭や身近な人の協力があったことを思い起こすよう言葉掛けをする。

自分自身への気付き	
児童の意識	自信・意欲・成就感 「ほめられてうれしいな」 「やればできるんだ」 日常化 「他のこともやってみたいな」 「もう自分でできるよ」
	教師付のき願への ・自分のよさに気付いてほしい ・自分に自信を持ってほしい。 ・気付きを他の活動に広げてほしい。 ・気付きを日常の生活に生かしてほしい。
	支気付きを深める例 ・気付きを認め、賞賛する。 ・問題解決していった力を認め励ます。 ・他の活動への広がりをも促す。 ・その子のよさを発揮できる場を設定する。

2 気付きの深まりに応じた支援表について

(1) 気付きが少ない時

対象と出会ってもあまり興味をもてず、すすんで対象とかかわろうとしない時である。そのため、気付きも少なく、たとえ気付いていても自分で意識していない状態である。

ここでは、児童が興味・関心に根ざした意識的な活動ができるよう友達とかかわらせたりする中で、自分のめあてをはっきりと持たせることが大切である。また、どんな気付きも認めたり、気付いたことを表出させたりして、気付きを意識するように促すことも重要となってくる。

そうすることで、児童は、自分の意識の中に対象をとらえていくことができると考えた。

(2) 自然・社会・人へ気付いていく時

児童は、活動を繰り返す中で、興味・関心・疑問・感動などの意識の流れに応じて身近な環境に気付いていく。

ここでは、一人一人の気付きを見取り、気付きが次の活動へとつながるように促したり、共感したり、共に考えたりしながら気付きを定着させることが大切である。また、友達同士のかかわりの中で気付きを広めたり、深めたりすることも重要となってくる。

そうすることで、児童は、こだわりを持って活動し、活動したことを生き生きと表現するようになると考えた。

このように、気付きを見取り、的確に支援することにより、気付きが深まると考えた。

(3) 自分自身への気付きが深まる時

児童は、充実した体験的活動を通して、気付きが深まっていく。やがて、児童に満足感や成就感が生まれると、それが次の活動の意欲となり、日常生活にも生かせるようになる。また、人とかかわりの中で感じ方の違いに気付いたり、自他のよさを認め合ったりするようになり、自分自身への気付きも深まっていく。

ここでは、その子のよさを発揮できる場を設定し自信を持たせたり、活動が日常生活につながるような新たな意欲をもたせることが大切となる。

そうすることで、児童は、自立への基礎を培っていくと考えた。

以上、本表の概略である。本表を基に実践授業に取り組むことを研究の主なねらいとした。なお、実際の授業では、児童の実態や願い、教師のねらいに応じて具体的な言葉に換えていく必要がある。また、自然とかかわりが多くなる単元では、「自然への気付き」の項目が独立して大きな比重を占めるなど、柔軟に作成すると効果的である。

また、支援表の番号は、児童の意識の流れの順番を表したものではない。児童の意識の流れは、大変複雑であり、個々によって異なる。そこで、教師は、支援表にとらわれることなく、一人一人の気付きに応じて的確な支援をすることが重要であると同時に、友達と比較することなく、その子の気付きがどのように深まっていったかを見取ることも大切である。

このように、一人一人の気付きを大切に見取り、気付きの深まりに応じた支援表を基にして実践授業の支援を予想して、授業に取り組むこととした。

V 実践事例

第1学年

自然の中での遊びを通して気づきを深める支援の工夫例

単元「城山に遊びにいこう」

1. 単元のねらい

- ・初夏の自然に気付く。
- ・城山で遊びたいことを自分なりにもち、計画できる。
- ・友達と楽しく遊び、友達のよさに気付く。
- ・自然とかかわることの楽しさを体感できる。
- ・遊んだこと・発見したことを、自分なりに表現できる。

2. 単元について

入学間もないため、小人数で固定遊具で遊んでいることが多い。下校後も、入学前からの友達と、室内でゲームやお絵描き、庭でサッカーやおままごとをしている。子供たちだけで公園へ行くことは少なく、自然を相手に遊ぶという経験は意外に少ない。一方、虫などについて図鑑やテレビなどから得る知識を持っている子は多い。

そこで、自然の中でおもいきり遊ぶことを通して、自分なりの発見や興味・関心にこだわりを持ってほしいと考え、学校のすぐそばであり、固定遊具がなく自然をそのまま残していて、自分たちの発想を大事にして遊べる城山公園で遊ぶことを設定した。

また、遊びの中で気付いたことや思いを表出させる機会を工夫し、自分が見付けたことや考えたことが友達から認められたり、友達と比べたりすることを通して、自分のよさに気付くことができると考えた。

3. 活動計画（8時間）

★予想される児童の気づき

(1) 城山へみんなで行ってみよう……2時間

★木がいっぱいあるね。大きなはっぱだね。ザリガニがいるよ。トイレがある。花が咲いてる。この水はきれいだね。ここに入っているのかなあ。かくれんぼをしたらおもしろそうだね。

(2) 遊びの計画を立てよう……2時間

★池の所にザリガニがいたんだよ。ザリガニとりしたいなあ。網を持っていたらいいんじゃないかなあ。着替えがあったほうがいいよ。ころんじゃったらどうしよう。崖滑りがしたいけど何かあったほうがいいかなあ。

(3) 城山でおもいきり遊ぼう……3時間

★湧き水は冷たい。こっちのほうが速く流れるよ。赤いところはよく滑るよ。フカフカだ。葉っぱのお布団だよ。石の下に虫がいる。前にもここにアメンボウがいたんだよ。ツルツルのはっぱだ。○○ちゃんじゃうずだね、やり方を教えてよ。この花いい匂い。一緒に花束にしよう。

(4) 楽しかったことを知らせよう……1時間

★お母さんに知らせたいな。こうやるとうまく滑るんだよ。紙芝居にしよう。みんなに教えてあげる。城山かるたを作ろう。

4. 気づきを深めるための支援の工夫と児童の変容

- ・城山ルームの活用…空き教室を利用して、池や川や道を作り教室全体を城山公園に見立てた。見付けたことを見付けカードに自由に書き、城山ルームで場所を確かめてどんどん貼っていった。この事で、どんな小さな事でも自分の発見として気軽に気づきを表出したり、友達のと比べたりして自信を持つことができた。
- ・計画書の活用…遊びたいことをはっきりさせ、イメージをもつことができた。より楽しく遊ぶために、崖滑りをしたい子は段ボール、ザリガニとりをしたい子は虫とり網などと持ち物にも気付いていった。また、お互いに計画書を見せ合うことで、友達のよさに気づき、持ち物を書き加えたり、「一緒に遊ぼう」と声を掛け合ったりした。
- ・一緒に遊ぶ…計画書には「水遊びがしたい」と書いたけれど、いざ水に入るとなると尻込みをしてしまったAさんと手をつないで一緒に川に入り、水遊びをした。「はいっちゃった」と自分に自信をもったり、「足が抜けない」と川底の様子に気付いたり。「石をめくったら、ちっちゃい虫がいた」と生き物にも気付くことができた。今度は「オタマジャクシをとりたい」と自然に積極的にかかわろうとする態度がみられるようになった。
- ・やってみせる…オタマジャクシをとろうとするがうまくいかないBさんのとなりに座り、実際にとってみせた。横からじっと見ていたBさんは、今度はオタマジャクシの動きをゆっくり観察し、両手をおわんのようにしてさっとすくいとることができた。自分でつかまえたオタマジャクシを教室に持ち帰り、水槽を用意し、餌を調べたり「たまちゃん」と名前を付けたりした。足の出方などオタマジャクシの成長に気づきながらカエルになるまで育てた。また、友達に「教えてあげる」と声を掛け、翌日の放課後には誘い合ってオタマジャクシとりに出掛ける様子が見られた。
- ・友達とかかわらせる…ぶつかることが多かったC君とD君は今回遊びたいことが同じだったので、一緒に行動するように声を掛けた。虫とり網を貸した事で、頼りにされることの喜びに気付いたC君。虫をたくさんつかまえるC君を「すごい」と感心して見たD君。お互いの違いやよさに気づき、かばい合ったり頼りにしたりする姿が見られるようになった。



5. 実践を振り返って

児童は城山公園の自然の中でおもいきり遊ぶことで、初夏の自然や友達と深くかかわった。水に足を入れたときの冷たさや、自分が捕まえた生き物の様子や、いろいろ試した中で一番うまく滑る崖滑りの方法や、同じアジサイでも場所によって色が違う事や、友達の虫とりのうまさなどに、体全体で気付いていった。このような活動を繰り返す中で、友達と誘い合って虫とりに行ったり、生き物の飼育を継続して取り組むようになった。季節が変わったら、「また行ってみよう」と意欲を示すようになり、身近な自然に積極的にかかわるようになった。

第1学年

家族とのかかわりを通して気づきを深めた支援の工夫例

単元「やってみたいな」

1. 単元のねらい

家族と自分とのかかわりに興味をもち、家庭内での自分の役割に気付く。
お手伝いについて興味をもつとともに、自分でできることは自分でしょうとする。

2. 単元について

「家庭での生活」という学校では見えにくい部分に焦点を当てて考えることにより、
自分と友達との違いや、自分自身について深く考えることができる。

3. 活動計画（12時間）

第1次 家族を紹介しよう（4時間）

- ・夏休みにしたことを発表しよう。
- ・家族について知らせよう。

第2次 こんなことをしているよ（6時間）

- ・自分のことを知らせよう…自分のコピーを作って家で自分でやっていることを、
知らせよう。

…家でやってみたお手伝いを知らせよう。（本時）

第3次 できるようになったよ（2時間）

- ・自分でやってみたことを振り返ってみよう…うちの人に手紙を書いたり、お手伝い
券を作ったりしよう。

4. 本時の活動（8／12時間）

(1) めあて

- ・お手伝いをするを通して、家庭内での自分の役割に気付く。
- ・自分のしたことを工夫しながら表現する。
- ・友達の表現を見て、友達の頑張ったことやよさに気付く。

(2) 展 開

児 童 の 活 動	主 な 評 価 と 支 援	支 援 表 との対応
1.発表の準備をしよう 2.グループの中で発表しよう	★家族の中での自分の役割に気付いたか。 →家族がやっている時はどんな様子だったか 尋ねる。	7】10】 15】16】 18】
3.お手伝いカードに 今度したいお手伝いを書こう	★友達の頑張ったことやよさに気付いたか。 →友達のコピーにシールなどを貼るよう促す →友達のよさに気付いた児童を賞賛する。 ★自分で更に挑戦してみようという気持ちにな ったか。	13】14】 20】

5. 児童の気づきの深まりに応じた支援表

		児童の意識	気づきへの教師の願い
気づきが少ないとき 1】家族で過ごす時間が多くなるよう家庭に協力を呼びかける。 2】家族に目が向けられるような活動計画を立てる。 3】夏休みに家族と過ごしたことなどを思い出せるような言葉かけをする。	⇒⇒⇒	興味・好奇心	・自分の家族の構成や役割 ・家族のしている仕事の内容 ・友達の家族と自分の家族との違い ・友達のしているお手伝い
		家族や友達への気付き	
		疑問・困難	・自分が直接かかわっていない時の家族の仕事 ・やってみたい仕事のやり方 ・自分がやってみたことの表現方法
		比較	・友達の家族構成や役割と、自分の家との違い ・友達とやってみたお手伝いと自分との違い ・友達の頑張ったこと
		喜び・感動	・家族にしてもらったこと ・お手伝いをして家族に認められたこと ・以前できなかったことができるようになったこと ・友達から認められたこと

6. 実践を振り返って

児童はそれぞれの家族に、お手伝いを通してより多くかかわるようになり、家族や自分の役割に気付いた。友達についても自分と比較し、それぞれの違いに気づき、友達のよさに気付くようになった。活動後も多くの児童が意欲的にお手伝いをしている。この活動中次のような児童の変容が見られた。

- ・家庭内での家族の役割に気づき、自分の役割を果たそうとした児童
- ・家族の自分に対する思いに気づき、家族を思いやるようになった児童
- ・友達や教師にもお手伝いしたことが認められ自信を持つようになり、他の学習にも自信を持って取り組むようになった児童

気付きを一步深める支援の工夫

- 4】興味を持続するような活動計画を立てる。
- 5】興味をもったことをさせるよう家庭に呼びかける。
- 6】家族のことで気付いたことを表現できる場を設定する。
- 7】友達同士思ったことを話すよう促す。
- 8】お手伝いカードに家族に励ましの言葉を書いてもらえるよう協力してもらう。
- 9】どこで困っているのかわかるまで見守る。
- 10】友達の様子を見るよう促す。
- 11】友達や教師が相談にのる。
- 12】疑問点や困難なところを表現できるように雰囲気作りをする。
- 13】比較して気付いたことを認め、賞賛する。
- 14】共に比べてみる。
- 15】自分がやってみたお手伝いを想起できるような環境を工夫したり言葉掛けをしたりする。
- 16】共に喜び、共感する。
- 17】感動したことを友達にも分かるよう表現するよう促す。

⇒⇒

自分自身への 気付き	自信	・自分ができるようになったこと ・家族の思いが分かったという実感
	意欲	・次にやりたいこと
		18】自信をもったことを認め賞賛する。
		19】活動が継続していくよう家庭に呼びかける。
		20】意欲をもっていることを認め、他の児童へも広げる。

・自分でできることに気付き、進んで自分のことは自分でするようになった児童
児童の気付きの深まりに応じた支援表を作成し、単元終了後も継続して利用していくことにより児童の気付きの深まりが分かり、個に応じた支援ができた。またその時有効だった支援を記録し、次の単元にも生かしていった。

この単元は、家庭との連携によって成り立つものであるため、家族との連絡を密にし、児童が今、どの状態にいてどんな思いを持っているか理解してもらった。そのため、家族の協力が得られ、児童の生活全体でお手伝いにかかわることができた。

1. 単元のねらい

- ・生き物を見つけたり、飼ったりしながら、それに親しみをもって接し、大切にしようとすることができる。
- ・世話をする活動を通して、どんな生き物も自分たちと同じように生命をもっていることに気付くことができる。

2. 単元について

身近な自然の減少や生活の変化に伴い、子供たちは自然と触れ合う機会が少なくなっている。しかし、具体的な活動体験を通して身近な社会や自然をとらえるという発達上の特徴を持つこの時期の子供は、ちょっとしたきっかけから、自然の事物や現象に興味を示し、活動に熱中していく。

今までに、犬や金魚・鈴虫などの生き物を家庭や幼稚園・保育園で飼ったことのある子供は多いが、自分で世話をし、育てたという経験をもつ子供は少ない。また生き物が好きで、カタツムリやヤモリ・バッタを教室に持ち込むことも多いが、つかまえることに興味がいき、継続した世話が苦手な子供も少なくない。生き物は好きでもその生き物の生態や飼い方についてはあまり知らない。また生き物の種類によって、死に対する認識に差がある。

このような実態をふまえて、ここでは、一定期間一人一人が自分の飼いたい生き物を育て親しむ場を設けるようにする。自分のもの、自分の大切なものという意識をもって、最後まで世話する中で、生き物の成長や変化、それらの不思議さや面白さ、特徴、また、世話する喜びや大変さなどに気付くとともに、自分たちと同じ生命を持っていることにも気付き、更に愛情を深め、生き物を大切にしようとする気持ちや態度を育てたいと考えた。

3. 活動計画（9時間扱い） ☐ 感心・意欲・態度 ☐ 思考・表現 ★ 気付き

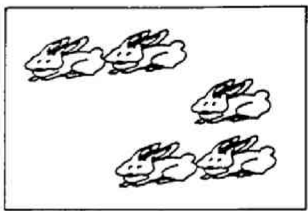
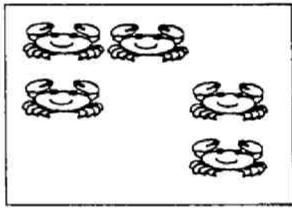
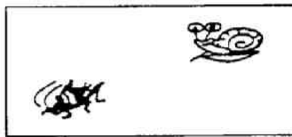
	児 童 の 活 動	評 価	←支援 *留意点	支 援
第 一 次	活動のきっかけ ・〇〇さんが教室にバッタとコオロギを持ってきたよ。 ・夏休み、〇〇さんはアゲハの自由研究をやったよ。 ・わたしも教室で虫をかってみたいな。			支 援 表 と の 対 応
	◎かってみたい生き物を決める。 ・わたしはハムスターを飼いたい。 ・きょう、コオロギをつかまえてこよう。 ・カニを飼いたいけど、どこに いるの？	○自分の世話した い生き物が見つ けられたか。	*自分で探した、自分で とった、自分で育てて いる生き物に限定す る。手に入らぬ場合は、 その生き物を飼ってい る家に頼んで分けても らう、借りる。 *児童の健康に留意して	

生き物の世話をしよう	◎生き物のかい方を知る	○飼ったことのあ る人に聞こうと しているか。	事前に調べておく。 (アレルギー、喘息など) ←教室に生き物に関する 本のコーナーを設け、 児童が自由に見られる ようにする。	14
	◎生き物の世話をする。 (常時活動)	★毎日の世話の中 で、発見や喜び、 疑問を見つけて いるか。	←いろいろな世話の仕方 を考えるよう助言する。 (えさをやる。すみかを 掃除する。鳴き声を聞 くなど)	10
	世話した生き物 ハムスター コオロギ カタツムリ クワガタ アゲハ(幼虫) ハナムグリ カブトムシ ブルーギル ドジョウ アマガエル カニ アリ 計12種類	○愛情をもって大 切に生き物の世 話を続けている か。	←世話しながら、見つけ たこと、感じたこと、 を『あのねカード』、 『生き物新聞』に書く よう助言する。	6
	・名前をつけたいな。 ・えさを食べたよ。 ・おかしいな。えさを食べない ・どうしてしんじゃったの? ・やった! たまごをうんだよ。		←生き物や飼育のことで 困ったことやわからな い時のために『生き物 こまった箱』を置き解 決に役立てる。	13
	・カエル新聞に誰もカードを はってくれない。 ・他の生き物もかってみたいな		←朝の会、帰りの会を利 用し、生き物の情報交 換する。	15
第二次 生き物じまんをしよう 4時間	◎自分の生き物じまんをする。 『わくわくいきもの ワールドをやろう』 (本時)	□自分なりの方法 で友達に自分の 生き物を伝えた か。	←他教科との関連を図り 生き物への思いや特徴 の気づきを深めるよう にする。	6
	◎自分の生き物じまんをする。 『わくわくいきもの ワールドをやろう』 (本時)	★自分の生き物に ついて更に気付 きを深める事が できたか。	←自慢の方法は児童の考 えに任せる。 (必要に応じて例を示す) *生き物の生命に危険の ない方法にする。 「生き物ワールド」後 生き物をどうするか 話し合いをする。 (もといた場所に逃がす Or家で続けて飼う)	11
	・これから生き物をどうしようか			22
				26

4. 児童の気づきの深まりに応じた支援表

気づきが少ない
1】その子が飼ってみたい生き物をできる限り認める。 2】一人では飼えない場合は友達と一緒に飼う 3】教師の生き物の飼育の体験談や生き物を題材に取り上げた心温まる実話や童話を紹介したり読み聞かせしたりする。 4】どんな気づきも認める。共感する。 5】教師も一緒にさわってみる。抱いてみる。

⇒⇒⇒⇒

	児童の意識	気づきへの教師の願い
自然への気づき	興味・好奇心	・生き物の成長や変化 
	疑問・困難	・飼い方や病気、死の問題などの困った問題を解決する手だて 
	比較	・他の生き物との共通点や相違点 
	喜び・感動	・生命ある生き物の世話には喜び、苦労、悲しみなどが伴うこと
	友達への気づき	・生き物の世話を通して、友達のよさ、自分のよさ 

生 物 飼 育 単 元

☆気付きを一步深める支援の工夫

- 6】世話して発見したことや感じたことや出来事を絵や文などで表現するように促す。＜カードの利用＞
 - 7】友達からの気付きを知る場を作る。
 - 8】生き物をなるべく一緒にいられる場所で飼育する。
 - 9】決定的瞬間（脱皮・羽化・誕生・捕食など）を視聴覚機器を使い記録する。
 - 10】気付く観点を示す。
 ＜さわってみる・抱いてみる・にらめっこしてみる・匂いをかいでみる・音を聞いてみる・話しかけてみる・まねしてみる・実験してみる・じっと見守る＞
 - 11】他教科との関連をはかる。
 ＜国語科の説明文・音楽科の歌づくりなど＞
 - 12】どうしてそうなったのか、わけを考えさせ、その生き物の生命に危険のない範囲で解決策を出すよう促す。
 - 13】飼育の上で困っていることを相談する場を設ける。
 ＜生き物相談箱・困った箱の設置。児童に尋ねる。＞
 - 14】生き物の生態や飼い方がのっている本のコーナーを教室に設置する。
 - 15】友達同士で情報交換する場を作る。
 - 16】その生き物のことについてよく知っている上級生や保護者や地域の人に聞いてみるように促す。または、学級に招き、話をしてもらう。
 - 17】朝の会や帰りの会等を利用し、『お知らせタイム』などで、他の生き物の情報を交換する。
 - 18】同じテーマで比較をするよう促す。
 ＜うんち比べ、足比べ、食べ物比べなど＞
 - 19】他の生き物とも触れあう場と時間を設定、保証する。
 - 20】生き物の寿命を人間の年齢にたとえさせてみる。
 - 21】教師も一緒に世話をする。共感する。
 - 22】感動をかたちに残す。＜表現する。＞
 - 23】児童が誤った世話だったことに気付かない場合は助言する。
-
- 24】友達とのかかわりの場面を拾い上げ認め賞賛する。
 ＜一緒に見つけてあげたり、世話をしたりした。＞
 - 25】大事に世話をした子のがんばりや優しさ、工夫ぶりを認め、賞賛する。

自分自信への気付き

自信・意欲・成就感

・どんな生き物でも自分たちと同じように生命をもっていること



- 26】生き物にとって本当に棲みやすいところを考えさせる。
- 27】他の生き物の飼育への広がりを促す。
 （願いに応じて）



5. 本時の活動（本時 8 / 9） ○感心・意欲・態度 □思考・表現 ★気付き

(1) 目標 ○自分で工夫したり，考えたりしながら自分の生き物自慢をすることができる。

○自分や友達の生き物のよさに気付き，更に大切に世話しようとする気持ちをもつ。

(2) 展開

児 童 の 活 動	評 価	←支援 *留意点	支援表との対応
わくわくいきものワールドをやろう			
◎どんな方法で自分の生き物 じまんするか確かめる。	○早く生き物自 慢をやってみ たい気持ちを もっているか。	←生き物じまんへの意欲を高める。 ←けがをしたときの対応について 教える。（*消毒薬の用意）	
◎生き物ワールドのやり方を 確かめる。		←友達の自慢を見て，わからない事 があったら質問してもよいことを 告げる。	
◎生き物ワールドで楽しむ。		←お客が少ない所には，教師が行っ たり，他の児童に誘いかけしたり する。	
— じまんの方法 — クイズで ビデオで 紙芝居で 遊び場で 触らせてあげる 楽器で つかまえた道具で	○楽しく生き物 自慢をしいい るか。	←友達の生き物と触れ合っている児 童に自分の生き物との比較を促す	18
	□工夫したり その子らしい 自慢方法をし ているか。	←うまく自慢が友達に伝えられてい ない児童には今までの気付きや発 見を想起させる。言葉がけをする。	6
		←かかわりの少ない児童には，気付 く観点を教える。	10
— 生き物ワールドのやり方 — じまんコーナーとお客に 分かれ，前半後半で交代 する。15分ずつ。	★友達の生き物 のよさに気付 いているか。	←生命の存続にかかわる変化（脱皮， 交尾など）を見せた生き物には， そっと見守るように促す。	10
		←乱暴な扱いをした時は注意をする。	
		←どんな気付きも認める。共感する。	4
	★自分の生き物 のよさを再認 識することが できたか。	←よい気付きを賞賛する。 比較する，自分なりの考えをもつ 疑問をもつ，さわることができた， 動作化する，前の経験を生かす， 実証する，その子らしい表現など	4
◎生き物ワールドで遊んだ感 想を発表したり，生き物 新聞にカードを貼ったりす る。	★友達のよさに 気付いたか。	←友達とのかかわりのよい場面を認 め，賞賛する。 ←今後の世話につながる気付きがあ れば取り上げる。	24

6. 実践を振り返って

(1) 気付きの見取り方の工夫について

世話をしながら発見したこと、不思議に思ったこと、感じたこと等をカードに書くよう促した。「生き物こまった箱」を通して飼育のことで困った事を表出できるようにした。また児童に直接聞いたり、つぶやきを拾ったりした。このように見取った一人一人の気付きを単元終了まで記録し、一覧表にした。

その結果、その子なりの気付きの変容していく過程が分かった。またその児童が大きく変容したきっかけになる気付きも読み取ることができた。この二点は、一人一人の気付きを深める支援に大変役に立った。

(2) 本単元で有効だった、気付きを深める支援の工夫について

大事に世話をした頑張りや優しさを認め、賞賛する

生き物への愛情を深めるだけでなく、その生き物が自分にとって大切な存在である事に気付き、また自信を付けることにもつながった。

—— ドジョウを世話したA児の例 ——

クラスでは控え目だが、クラスで一番長い期間世話をがんばってきた事を「生き物ワールド」の時、教師から全員の前で紹介された。その事を知っていた友達からも共感の言葉が出た。A児はうれしい顔をした。その日の夜、A児は「僕はいつからドジョウを飼っていたっけ？」と母親に改めて聞いた。今日に至るまでの自分とドジョウとのかかわりを再認識した。「ドジョウは僕の宝物なんだ」と母親に言った。(母親の話から)

後日、展覧会の図工の作品で、「ぼくとドジョウのゆめのおうち」を見事に表現した。

世話して発見した事や感じたことを自分なりの言葉で表現したものを賞賛する

自分なりの言葉で表現したものを全体にも紹介する

他の児童の気付きのかかわり方にもよい影響を与えた。どの児童も安心して自分なりの言葉で表現しようとした。初めの頃は図鑑に書いてあった事をそのまま書き写す児童もいたが、次第に自分とのかかわりで書いた表現が多く見られた。

—— 自分なりの言葉の例 ——

- ・「かにさんは、私のがぞくとすぐかくれます。かにさんははずかしがりやさんです。」
- ・「せんせいあのね、きょうハムスターがげんきだから、わたしもげんきになるよ。」
- ・「わたしのコオロギはひるまはあまりなきません。よるなくことがおおいです。だからわたしは土よう日がくるのが楽しみです。コオロギがいえにかえってくるからです。」

自分の生き物を教えたり、友達の生き物と触れ合ったりする場を設定した。

単元の最後に「生き物ワールド」を行った。どの児童も生き生きと活動していた。友達から「○○ちゃんのカエルはかわいいね。」などほめてもらったり、友達の生き物と自分の生き物の特徴を比較したり、この触れ合いを通して自分の生き物のよいところを再認識することができた。何人もの児童が、「これからも大事に世話していきたい」とこの日のカードに書いた。ちょうど「生き物ワールド」の日、B児の世話していたカタツムリがクラスで初めて卵を産んだ。今まで世話が思い通りにいかなかったB児にとって最良の日。得意気になって友達に卵をみせていた。

1. 単元のねらい

- 野菜を育てる活動を通して、成長の様子に関心を持ち、進んで世話をする。
- 育てた野菜を収穫する喜びを味わう。

2. 単元について

植物を育てることは、長期にわたる栽培活動をしていくことが課題となる。そこで「育てて食べる」という子供たちの願いがあった野菜を取り上げた。自分で育てるんだという願いを実現するために、育てる野菜は一人一人に決めるようにした。野菜を育てることは、決して自分の思い通りになることではない。自分で世話をしながらその成長や変化に気付いて初めて喜びや感動をもって学んでいくことができると考えた。継続して育て、野菜の育つ様子を楽しみにしていくことは、子供たちの心を育てていくことにつながるのだろう。

1学期には、一人一人の個人の畑（植木鉢）でミニトマトやナス等の自分の好きな野菜を、また共同の畑（学級園・プランター）ではみんなで話し合って決めたダイズを育ててきた。2学期になって収穫したダイズでできるものを調べ、簡単に調理して収穫を喜び合った。自分たちで育てた野菜を料理して食べるという経験が少なかった子供たちは、大きな感動をもって活動していた。こうして収穫の終わった後の畑を見た子供たちの中から「また何か植えたいな。」という声が上がった。そこで、そうした子供たちの思いを大切に、前単元での経験を生かしながら、進んで活動できるようにしたいと考えた。

3. 活動計画（14時間）

第1次 野菜を植えよう（4時間）

- ・自分の育ててみたい野菜を話し合う。
- ・育ててみたい野菜について調べる。
（野菜の種類、種のまき方、育て方、収穫した野菜でできる料理等）
- ・調べてきたことを紹介し合い、何をそだてるか決め、育てる準備をする。
- ・種まきをし、植えた野菜への願いをカードに書く。

第2次 野菜の世話をしよう（4時間）

- ・成長の様子を見ながら、世話をする。
（水やり、支柱立て、雑草抜き、虫取り、わら敷きなど）
- ・「大きくなったねカード」をかいていき、野菜ごよみを作っていく。
- ・困ったことや心配なことを話し合っ、方法を考え、世話をしていく。

第3次 野菜のとりいれをしよう（6時間）

- ・できた野菜をどのように食べるか話し合う。
- ・自分たちで計画し、準備する。
（サラダを作ろう、お味噌汁に入れよう、漬物にしよう等）
- ・野菜をとりいれ、簡単に調理して食べる。
- ・野菜作りの活動を振り返る。（絵日記に書く、手紙を書く等）

4. 本時の活動（2 / 14 時間）

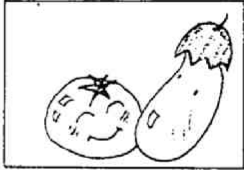
- (1) 目標 ○自分たちで調べてきたことを紹介し合い、自分の育てたい野菜を決める。
○自分の野菜を育てる準備をする。
- (2) 展開 ○関心・意欲・態度 □思考・表現 ☆気付き

時	児 童 の 活 動	評 価 (見取る視点)	支援（←は気付きにかかわる支援） (※留意点)	支 援 表 と の 対 応
	自分の野菜をそだてる準備をしよう			
5	◎活動の約束を確かめる ◎調べてきたことを紹介し合う。 （フリータイムで自由に見合う。） ・早くやりたいな。 ・ぼくはカブのこと調べてきたよ。 ・ぼくと同じの調べてきた人いるかな。 ・種も買ってきたよ。 ・何を育てようかな。	○★自分の育てたい野菜について進んで調べようとしているか。 （つぶやき） （行動観察） □野菜について自分なりに調べようとしているか。 （準備した物）	野菜ごとにコーナーを作り、それぞれの調べてきたものを掲示したり、実物を置いたりする。 実物を見たり、触ったりしてより深くかかわれるようにする。 友達の調べてきたことでもっと知りたいことがあったら、質問してもよいことを告げる。 自分の調べたことと友達の調べたことを比較するよう助言する。 よい気付きを賞賛する。 （前の経験を生かす、疑問をもつ、比べる、自分なりの考えをもつ） カードから一人一人の児童の野菜に対する思いや願い、気付きを見取っていく。認め共感し、これから世話をし続けていこうとする意欲を引き出していく。 ※一人一人が自分なりの準備が進められるような場を設定する。 （紹介を見ながらメモできる場所、プランター等を身に行ける場所、実際に種まきできる場所など） 前単元でのミニトマトやダイズを育てたときの経験を思い出すように言葉掛けをする。 今後の世話につながる気付きがあれば、取り上げ友達に広める。	⑨ ⑪ ⑨ ⑨ ⑤
20	◎自分の育てたい野菜を決めてカードに書く。 ・ぼくはネギのお味噌汁大好きだから、ネギ。 ・カブをつくってみんなで食べたいな。 ◎野菜を育てる準備をする。 ・早く植えてみたいな。 ・種のおふとんを作っておあげよう。 ・肥料を混ぜよう。	○自分なりの思いをもって育てたい野菜を決め、育てる準備をしようとしているか （カード） （つぶやき） ★自分の野菜の種のまき方や育て方に気付いているか。 （行動観察）		① ⑩
40	◎後片づけをする。			⑩

5. 児童の気づきの深まりに応じた支援表

気づきが少ない
1】一人一人の育てたい野菜をできる限り認める。 2】前単元での活動を想起させ、意欲付けする。 3】「育てて食べるんだ」などのめあてをはっきりもたせる。 4】一人一人に個人の畑（植木鉢・プランター）を用意する。 5】どんな気づきも認め、共感する。 6】教師も共に活動する。



	児童の意識	気づきへの教師の願い
自然への気づき	興味・好奇心	・植物の成長や変化 ・発見の喜び 
	疑問・困難	・世話の仕方で困っていることや失敗を乗り越えていく手だて ・長期にわたって世話をするつらさ
	比較	・春の野菜作りとの違い ・いろいろな野菜 ・四季の移り変わり
社会への気づき	喜び・感動	・世話をし続ける満足感 ・収穫への期待感・喜び
		・いろいろな人が野菜作りにかかわってくれたこと ・友達のよさ 

○各自調べてきたことを情報交換する場を設定した。いろいろな野菜の紹介を見る中で、「ゴボウは二年生のうちにはできないんだって。」と収穫の時期が異なることや同じホウレン草でもいろいろな名前があって種の形も違うこと等に気づき、野菜に興味・関心をもって活発に活動することができた。また種のまき方が分からず、用意してきた種の袋に書いてある説明書きを読んでいたC児に、「Dちゃんが調べてきていたよ。聞いてごらん。」と言葉掛けしたことで、D児と一緒に協力して種まきを始められた。前単元での活動や育てたい野菜について調べる活動を通して得た気づきをフルに生かしたい。そのために友達に聞いてみるように言葉掛けしたり、聞き返したりする支援をすることによって児童はもう一度立ち止まって自分の気づきを振り返ることができた。

植 物 栽 培 単 元

☆気付きを一步深める支援の工夫

- 7】図鑑や科学読み物を用意する。
 - 8】人に聞いたり、図書館で調べたりすることを助言する。
 - 9】友達からの気付きを知る場を作る。
 - 10】世話して発見したことや感じたことや野菜の様子を絵や文で表現するように促す。
 - 11】教室内にカードを掲示するスペースを確保しておいていつでも自由に貼れるようにしておく。＜野菜ごよみ＞
 - 12】野菜の成長や変化の著しいときをとらえて活動を促す。
 - 13】成長の節目を視聴覚機器を使い記録する。
 - 14】さわってみる、匂いをかぐなど気付く観点を教える。
 - 15】困っていることや心配なことを相談する場を設ける。
 - 16】みんなで話し合い、方法を考えるようにする。
 - 17】自分たちで解決できない問題があったときには、先生方や主事さん、または地域の人達に自分で聞きに行くよう助言する。
 - 18】それぞれの野菜ごよみを掲示し、情報交換を促す。
 - 19】春の野菜作りの経験を（野菜ごよみを見せながら）想起できるように言葉掛けをしたり、環境を作ったりする。
 - 20】世話の仕方や学級園の様子についても話題にする。
 - 21】教師も一緒に世話をする。共感する。
 - 22】感動をかたちに残す。
 - 23】収穫したものをどうするか自分で考えていくように、共に考える。
-
- 24】いろいろな場面で家庭の協力を得ていく。
 - 25】学校の先生や主事さんが、放課後や休み中に世話してくださっている様子を記録しておく。
 - 26】友達とのかかわりの場を拾い上げ賞賛する。

自分自信への気付き

自信・意欲

- ・野菜の世話をやりとげた自分のよさ
- ・「自分たちが（私が）世話をしたから相手が育つ」ということ

⇒⇒

- 27】長期にわたる世話や感動を認め賞賛する。
- 28】収穫したものを食べるという活動を取り入れて、実りの喜びにする。
- 29】ほかの植物の栽培の広がりをも認める。
- 30】問題解決をしていった力を認め励ます。

6. 実践を振り返って

○児童は「自分の畑で好きな野菜を育てたい。」という願いを強くもち、自分の育ててみたい野菜について調べようという活動に発展していった。それぞれの児童が、家の人に聞いたり、野菜店や種苗店に取材に行ったり、図書館に行ったり等自分なりの方法で調べた。最初「どうしてもまたミニトマトを育てたい。」と話していたA児は店に種を買いに行くが見つからず店員さんに尋ねた。そして「今は寒いからミニトマトは植えられないんだって。」という気付きが生まれた。またネギかカブを育てたいと迷っていたB児は、家の人に「ネギはベランダで作ったことがあるけど難しかったよね。」と聞き、カブを育てることに決めた。進んで様々な人にかかわっていくことで気付きが広まり、深まった。

VI 研究の成果と今後の課題

1. 研究を通して明らかになったこと

(1) 気付きが深まっていく過程の設定と支援

気付きを深めていく過程を3つに分け、それぞれの過程において気付きを見取り、深める有効な支援の在り方を探った。その結果、次のことが明らかになった。

ア 気付きの少ない時では、日頃の児童理解に基づき、児童の興味関心に根ざした支援が有効であることが分かった。その結果、教師は、これまで以上に児童の思いや願い・経験を把握したり、前単位とのかかわりの中で活動計画を作成したりすることが必要であることが分かった。

イ 自然・社会・人への気付いていく時では、児童の気付きは、対象とかかわる中で深まっていた。そのための有効な支援は、＜人とかかわりの中で気付きを広め深める支援＞＜立ち止まり考えることができる支援＞＜気付きを表出できる支援＞が有効であった。これに基づいて具体的な支援を考え授業を実践することで、その有効性を確かめることができた。

ウ 自分自身の気付きが深まる時では、認め励ますことで、自信をもち、すすんで対象とかかわろうとすることが分かった。単元が終ってからも、児童がどのようにして活動の経験を日常生活に生かそうとしているか、見取ることが大切であることが分かった。さらに、それを見取り励ますことにより、児童は、自信をもち次の活動へと意欲をもって臨むことが分かった。

(2) 気付きの深まりに応じた支援表の作成について

気付きの過程に見合った支援表を作ることで見通しを持った支援ができた。また、児童の意識の流れに沿った活動計画を作成することができるようになった。

一人一人の気付きに応じた支援をすることにより、児童の気付きは、より深まっていた。

2. 今後の課題

(1) 気付きを深める過程における支援については、さらに多くの実践を重ね、支援表を充実させ、多くの単元や活動で活用できるよう研究を進めていく必要がある。

(2) 気付きの深まりが分かり、的確な支援をするために、今後も気付きを中心に長期にわたり記録をとる必要がある。また、その分析と支援の方法を研究することも必要である。

(3) 活動中の児童の心理状態を的確に捉え、その時その場の最適な支援をすることが重要である。気付きを広げ深めるためには、時には、見守ることも大切である。教師の日頃の児童理解がより一層求められねばならない。